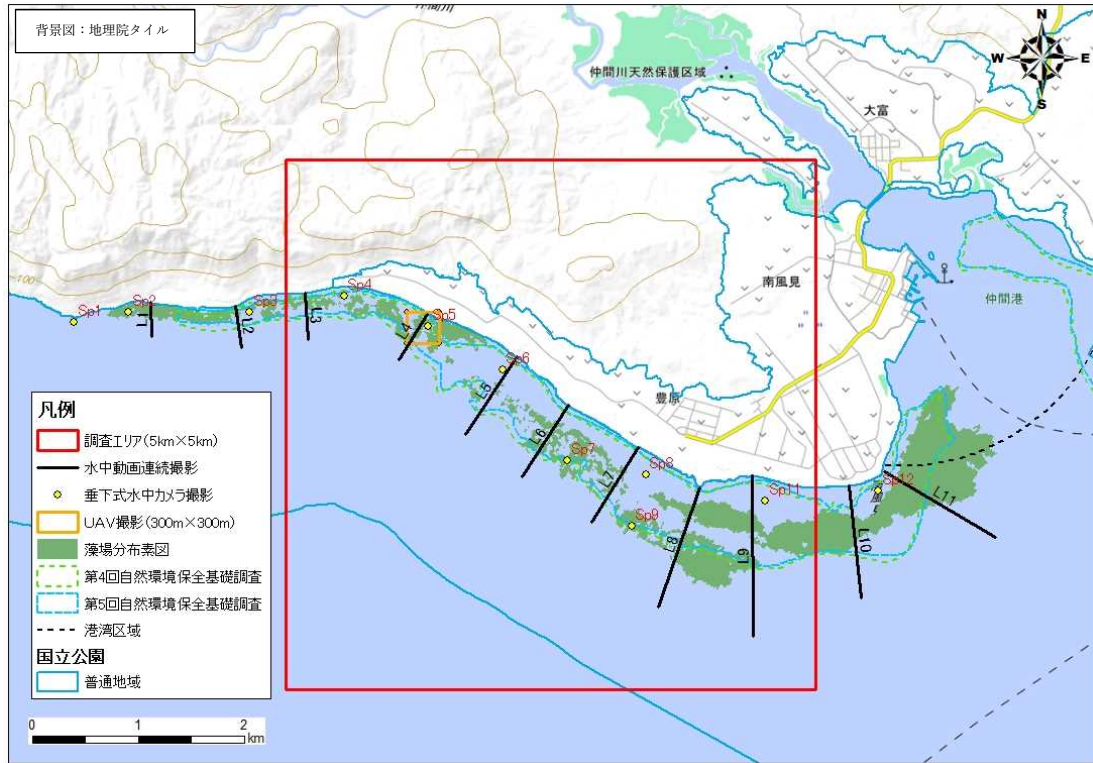


(1) 調査海域名	南西諸島沿岸海区 南風見田
(2) 調査海域の所在	沖縄県 八重山郡 竹富町 字南風見地先

(3) 調査海域及び調査位置図

【調査位置図】



(4) 調査位置の詳細 (WGS84)

詳細な位置情報は掲載しておりません。詳細な位置情報を希望される場合は、藻場調査ウェブサイトの「現地調査の結果」の「調査結果（データ）」をご覧ください。

【水中動画連続撮影】

ライン番号	岸側基点				沖側基点				測線長 (m)
	緯度	経度	緯度	経度	緯度	経度	緯度	経度	
1	-	-	-	-	-	-	-	-	319
2	-	-	-	-	-	-	-	-	401
3	-	-	-	-	-	-	-	-	443
4	-	-	-	-	-	-	-	-	505
5	-	-	-	-	-	-	-	-	884
6	-	-	-	-	-	-	-	-	808
7	-	-	-	-	-	-	-	-	825
8	-	-	-	-	-	-	-	-	1,183
9	-	-	-	-	-	-	-	-	1,509
10	-	-	-	-	-	-	-	-	1,063
11	-	-	-	-	-	-	-	-	1,216
測線長 計									9.2km

【垂下式水中カメラ撮影】

スポット 番号	緯度		経度	
1	-	-	-	-
2	-	-	-	-
3	-	-	-	-
4	-	-	-	-
5	-	-	-	-
6	-	-	-	-
7	-	-	-	-
8	-	-	-	-
9	-	-	-	-
10	-	-	-	-
11	-	-	-	-

【 UAV 撮影（オーバーラップ撮影範囲）】

撮影範囲	緯度		経度	
A	-	-	-	-
B	-	-	-	-
C	-	-	-	-
D	-	-	-	-

(5) 調査年月日 令和元年 10 月 18 日～10 月 20 日 (UAV 撮影：10 月 21 日)

(6) 調査実施者 株式会社パスコ 北野武司 (調査責任者)

(7) 調査海域の概要

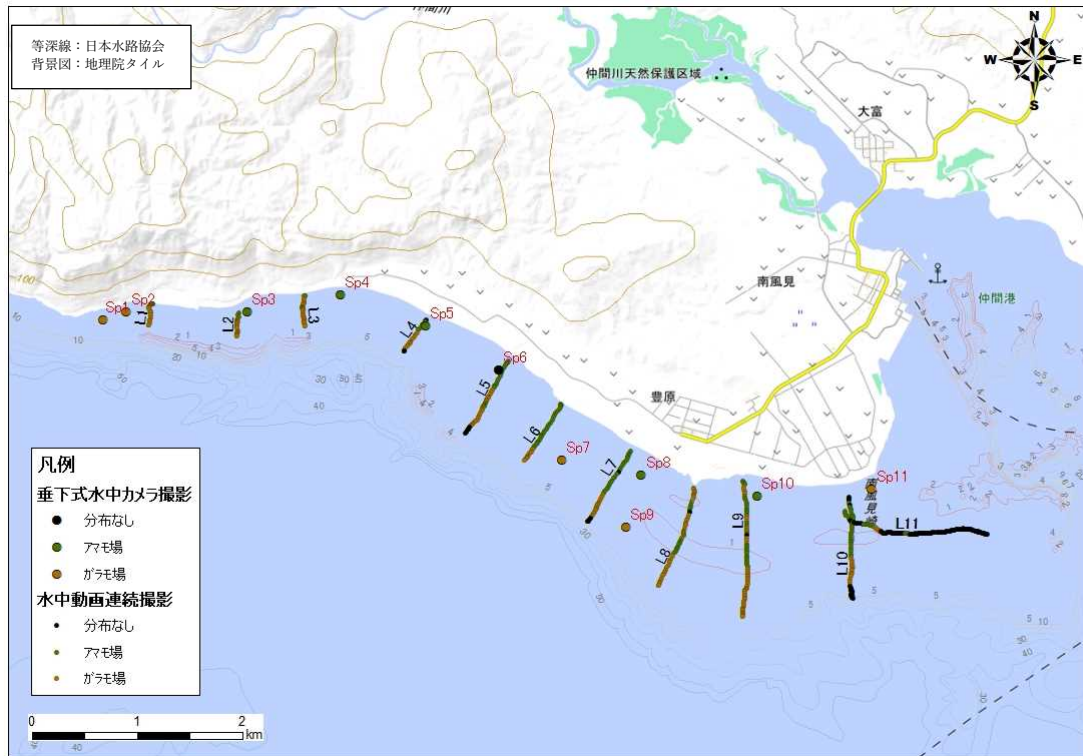
西表島の南岸に位置する南風見田海岸の一带は西表石垣国立公園の公園区域に含まれ、サンゴ礁により藻場のみられる礁池内は比較的静穏な海域である。第4回および第5回自然環境保全基礎調査では、礁池内でウミシヨウブ、リュウキュウアマモ、ボウバアマモ、リュウキュウスガモを優占種とするアマモ場の分布が確認されている。

現地調査は、これら南風見田海岸一带の礁池内に分布する藻場を対象として実施した。

本海域での高度 100mの年間平均風速は 7.5m/s 前後となっている (NeoWins (洋上風況マップ) : NEDO)。

(8) 調査結果 ①水中動画連続撮影

【確認結果平面図】



測線 1：南風見田海岸の最も西側の調査測線、水深 D. L+0.7～-0.6m、底質はホンダワラ類の生育する水深 0.7～-0.6mの沖側はサンゴの着生もみられる岩盤、アマモ類（リュウキュウスガモが優占）は岸側の水深 0.0～-0.4mの砂地である。ホンダワラ類（ヒイラギモクが優占）は密生～濃生の高い被度で礁原に繁茂している状況がみられ、アマモ類は岸側の砂地に疎生の被度で藻場を形成していた。

測線 2：西側の調査測線、水深 D. L+0.5～-0.2m、底質はホンダワラ類の生育する水深 0.5～-0.2mの沖側はサンゴの着生もみられる岩盤と砂、アマモ類の生育する水深 0.0～-0.1mの岸側は主に砂・泥である。ホンダワラ類は密生～濃生の高い被度で礁原に繁茂している状況がみられ、アマモ類は岸側の砂地に疎生～濃生の被度で藻場を形成していた。

測線 3：西側の調査測線、水深 D. L+0.2～-0.6m、底質は沖側では主に岩盤と砂、岸側は巨礫と砂となっている。礁池沖側の水深 0.2～-0.5m付近でホンダワラ類が密生～濃生の高い被度で分布し、岸側の砂地ではアマモ類が密生～濃生の被度で分布、また、ホンダワラ類とアマモ類が混生する状況もみられた。

測線 4：南風見田海岸の調査測線、水深 D. L+0.5～-4.7m、底質は沖側では主に岩盤と砂、岸側は礫、砂となっている。礁池沖側の水深 0.4～-0.5mの浅所でホンダワラ類が密生～濃生の高い被度で分布し、岸側の砂地ではアマモ類が濃生の被度で分布していた。

測線 5 : 南風見田海岸の調査測線、水深 D. L+0.4~-0.4m、底質は沖側では主にサンゴの着生もみられる岩盤、岸側は砂となっている。礁池沖側の水深 0.4~-0.3mの浅所でホンダワラ類が概ね密生の被度で分布し、岸側の砂地ではアマモ類が密生~濃生の被度でホンダワラ類と混生した分布していた。

測線 6 : 南風見田海岸の調査測線、水深 D. L+0.6~-1.0m、底質はホンダワラ類の生育する沖側では主に岩盤、アマモ類の生育する岸側は砂となっている。ホンダワラ類は水深 0.6~-0.2mで密生~濃生の高い被度で分布し、アマモ類は岸側の水深 0.3~-1.0mの範囲で密生~濃生の被度で分布していた。

測線 7 : 南風見田海岸の調査測線、水深 D. L+0.6~-1.4m、底質は沖側では主に岩盤と礫、岸側は礫、砂となっている。礁池沖側の水深 0.6~-0.5mの浅所でホンダワラ類が概ね密生の被度で分布し、岸側の礫、砂地ではアマモ類が概ね密生の被度でホンダワラ類と混生して分布していた。

測線 8 : 南風見田海岸東側の調査測線、水深 D. L+0.3~-1.7m、底質はホンダワラ類の生育する沖側では岩盤、礫、砂、アマモ類の生育する岸側は礫、砂であり、海岸線付近は岩盤となっている。アマモ類とホンダワラ類が底質の変化に応じて測線上を岸付近まで交互に出現する。

測線 9 : 南風見田海岸東側の調査測線、水深 D. L+0.4~-1.9m、底質はホンダワラ類の生育する沖側では岩盤、礫、砂、アマモ類の生育する岸側は礫、砂であり、海岸線付近は岩盤となっている。アマモ類とホンダワラ類が底質の変化に応じて測線上を岸付近まで交互に出現する。岸近くの水深 0.1~-0.8mの砂地では、アマモ類としてウミシヨウブ、リュウキュウスガモが分布していた。

測線 10 : 南風見田海岸東側の調査測線、水深 D. L+0.2~-6.3m、底質は沖側では岩盤、礫、砂、アマモ類の生育する岸側は主に礫、砂である。ホンダワラ類は沖側の水深 0.2~-1.0m付近でみられ、ウミシヨウブを含むアマモ類は礫、砂地の水深 0.1~-2.6m付近にみられホンダワラ類と混生する状況もみられた。海岸線付近は岩盤となっている。

測線 11 : 南風見田海岸東側の大原港近くの調査測線、水深が浅く暗礁が多いことから計画測線より起点位置を変更して調査を実施した。水深 D. L-0.4~-3.0m、底質は沖側では主に礫であり、礫、砂の箇所ウミシヨウブを含むアマモ類がみられた。アマモ類は濃生の被度の高い箇所がパッチ状に出現し、底質の変化に応じて測線上を岸付近までホンダワラ類と混生する状況もみられた。



ガラモ場 (測線 2)



アマモ場 (測線 7)

(8) 調査結果 ②垂下式水中カメラ撮影

【垂下式水中カメラ撮影 調査結果一覧】

地点番号	水深 (D. Lm)	底質	主要な藻類 (種名・被度)	備考
Sp1	0.2	岩盤	ヒイラギモク60%	
Sp2	0.1	岩盤	ヒイラギモク30%	
Sp3	-0.5	岩盤、砂・泥	リュウキュウスカモ60%、ヒイラギモク30%	リュウキュウスカモとヒイラギモクとの混生藻場
Sp4	-0.2	砂・泥	リュウキュウスカモ・ウミシヨウブ ⁶ 80%、ヒイラギモク+	リュウキュウスカモ・ウミシヨウブ ⁶ とヒイラギモクとの混生藻場
Sp5	-0.2	礫、砂・泥	リュウキュウスカモ60%、ヒイラギモク60%	リュウキュウスカモとヒイラギモクとの混生藻場
Sp6	-1.0	礫、砂・泥	-	
Sp7	-0.3	礫、砂・泥	ヒイラギモク60%	
Sp8	-0.3	砂・泥	リュウキュウスカモ80%、ヒイラギモク10%	リュウキュウスカモとヒイラギモクとの混生藻場
Sp9	-0.2	礫	ヒイラギモク30%	
Sp10	-0.5	砂・泥	リュウキュウスカモ・ウミシヨウブ ⁶ 80%	リュウキュウスカモ・ウミシヨウブ ⁶ とヒイラギモクとの混生藻場
Sp11	-0.3	礫、砂・泥	ヒイラギモク30%、ウミシヨウブ ⁶ 10%	



ホンダワラ類(地点 1)

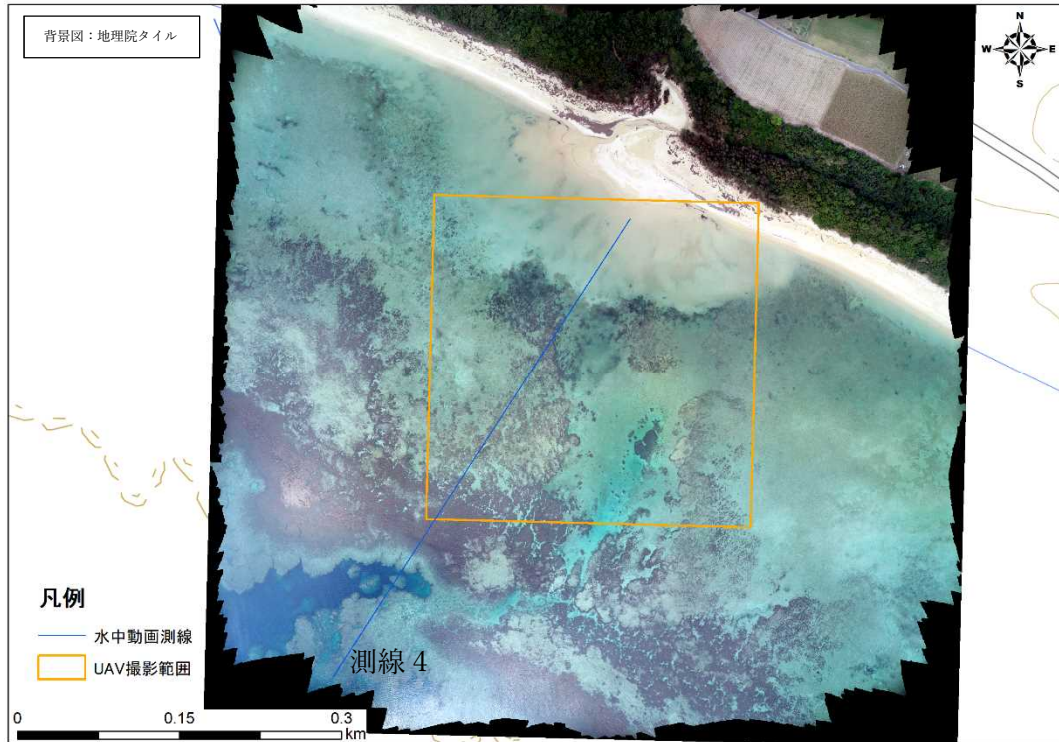


アマモ類(ウミシヨウブ)(地点 10)

(8) 調査結果 ③UAV 撮影

【UAV 撮影結果 簡易オルソ画像】

簡易オルソ画像からは、撮影範囲 (300×300m) 内の岸側にはアマモ場、沖側はガラモ場が分布している状況が確認できる。



撮影時間	潮位(m)※	風向・風速	波高(m)	撮影高度(m)	備考
13 : 18 ~13 : 30	D.L 1.22m	北 3m/s	0.5 以下	149	

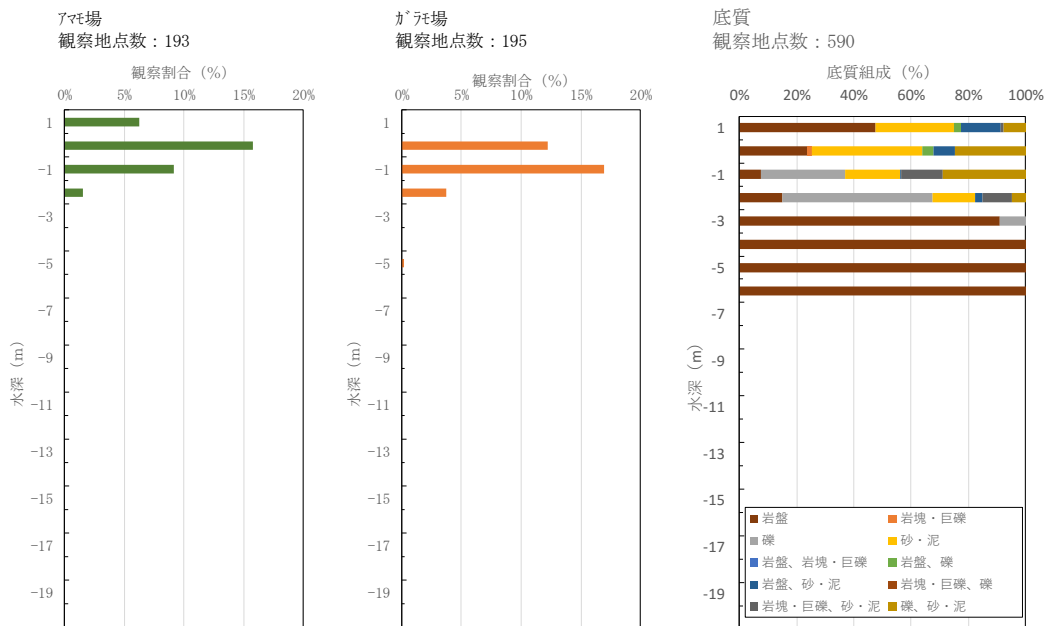
※潮位は、海上保安庁推算潮位の白浜（西表島）13 時時点

(9) 藻場分布調査結果図

【藻場分布調査結果図】



【藻場タイプ別出現水深頻度図】



(10) まとめ

本海域は、西表島の南岸に位置し、典型的なサンゴ礁地形となっている。海域の中央は南風見田海岸と呼ばれる砂浜がみられ、その西側と東側の海岸は岩礁である。礁池内の底質は砂地と死サンゴ片などの礫、岩礁であり、海岸近くは砂、沖には礫、岩礁が多い。藻場は礁池内に分布しており、ウミシヨウブ、リュウキュウスガモなどのアマモ場が岸寄りの砂地の水深D.L+0.2~-1.0m付近で密生~濃生の被度で広範囲に分布していた。ホンダワラ類のガラモ場はアマモ場より沖側浅所の礁原で多くみられ、水深D.L+0.6~-0.5m付近で濃生の高い被度で帯状に分布していた。藻場の構成種はガラモ場ではヒイラギモクを優占種として、カラクサモク、ヤマネモク、アマモ場ではウミシヨウブ、リュウキュウスガモ、ボウバアマモ、ウミジグサ属などであった（構成種は現地同行の有識者の確認による出現種）。

(11) その他特記事項

藻場構成種としては、アマモ類ではコアアマモや、ウミジグサ属などの明らかに葉が短く幅の細いタイプと、ベニアマモ、リュウキュウスガモなどの明らかに大きさの異なる種が水中カメラで確認されているが、ホンダワラ類ともに撮影画像では細部形態の確認が困難であったため、分布地域と形態が特徴的なウミシヨウブを除き種名の確定は行っていない。

※ 潮位補正は、海上保安庁推算潮位の白浜（西表島）を用いた。